

ゼウスな人々

第二話

愛のメッセンジャー
キューピット

どらやま てっさ
道楽山鉄茶

第二話 愛のメッセンジャー・キューピット

ゼウスの町の外れに、キューピットという人物が住んでいる。

彼は、むき卵のようなつやつやとした白い肌、黒目勝ちな大きな瞳、くるくると巻かれた金色の髪を持ち、小柄で少しぽっちゃりとした体型をしており、見た感じは可愛い子供である。しかし、誰も彼の年齢を知らない、それどころか、性別すら知られていなかった。

キューピットは自宅でメッセンジャー業をしている。

古代ギリシャにおいて、他所の町に書類を送る場合、メッセンジャーを使って送り届けるのが普通である。町と町の間には、山賊が居たり野獣が居たりして危険であるから、プロに頼むのが安全確実である。

メッセンジャーは皆、足の速い馬を持っており、それに乗って町から町へ疾走する。

途中で山賊や野獣に出くわしても、ぶっちぎり、追いつかれる事は無い。

キューピットも、そんなメッセンジャーの一人だが、彼の場合、運ぶのは書類だけではない。言葉を運ぶ。それも愛の言葉を運ぶのが得意であった。

…… おお～、リリースよ、リリース。わたしは、おまえの、全てを愛している。

…… たとえそれが、神のご意思に反しようとも、

…… たとえそれが、この世の滅びを招こうとも、

…… わたしは悔やみはしない、おまえと共に、ずっと、ずっと ……

片膝をつきながら口上を述べていたキューピットは、急に顔を伏せ、

…… 死してなお、ずっと ……

きっかり五秒待ち、やおら両手を広げながら顔を上げ、

…… 共に愛の道を歩こう ……

と言った。

すると、リリースは、

…… 私もよ、ブルータス。嬉しいわ。

と応えた。

……

これは昨日の仕事であるが、キューピットはブルータスのメッセージをリリースに伝え、リリースから「私もよ、ブルータス。嬉しいわ」という返事をもらった。

ブルータスのメッセージはキューピットの創作である。

ブルータスから聞いたリリース情報、『彼女は人妻である』、『わたしとの不倫に罪の意識を抱いている』、『彼女は演劇好きである』、このような情報を基にキューピットはメッセージを創作し、効果的に伝えたのだ。

このあとキューピットはリリースの返信依頼を請け、さらにブルータスの再返信依頼を請けた。メッセージは全て彼の創作。ブルータスもリリースもどんなセリフが飛び出すのか、わくわくしながら聞いていた。

こんな方法でメッセージを運ぶのはキューピットだけである。
彼はこの分野の第一人者として、毎日忙しく働いていた。

ある日キューピットが近所の食堂で昼ごはんを食べていると、眼光鋭い男が、入口の扉を蹴り店内に入ってきた。男は店の主人を見つけると、彼の前につかつかと進み、

「おい、親爺。金の取立てに来たぞ」

と言った。

「え！？ なに？ …… あんた、誰なんですか！」

驚いている主人に、懐から紙切れを取り出し、

「あんた、一ヶ月前に肉屋から牛肉を仕入れたね。肉代が五両、一ヶ月の利息が五両、取立手数料が十両、合計で二十両。ほれ、これが計算書だ」

男は店主の目の前で紙切れをひらひらと振り回した。

「んな～……。高いよ、めちゃくちゃだよ……」

ひらひらする紙から顔をそむける店主に、男は、

「がたがた言うな。さっさと金を払え。俺に手荒なまねをさせるな」

と凄んだ。

男は背が高く、巨漢の店主を頭一つ上から見下ろすが、かなりの細身である。

店主は肉切り包丁を手に持っているが、男はなにやら人形のような物を持っている。

『こいつ……強いのか？ あの人形は何なんだ？』

店主は顔をそむけたまま、目玉をくりくり動かして男の様子をうかがった。

しかし武術の心得が無い主人には、男の強さも、人形の正体も分からない。

「ねえ、ちょっといいですか……あなたは、武器を持っていますか？ この町では武器の所持は禁止されているのを知っていますか？」

店主は尋ねてみた。

「ふふ……。なるほど、そういう魂胆か……」

男はあとずさりし、店主の包丁が届かないよう距離をとった。

「え！？ いや、そんな魂胆など無いですよ。嫌だなあ、誤解ですよ」

店主は手を振って否定したが、男が人形を左手に持ち店主をにらみ付けたので、「くっ！ 来るか！」と、包丁を構えた。

「ねえ、タロータ。あのおじさんは、お金を払わないと言ってるよ。悪い人だね……」

男は人形に話しかけた。

人形の身体が少し揺れ、「カタカタカタ」と音を立てた。

「ねえ、タロータ。悪い人はどうなるんだろうね……」

男がもう一度人形に話しかけると、人形は、

「死ぬね」

としゃべった。

「え～！？」

っと驚き、

「そいつは生きているのか！？」

と大声を出す店主。

「ふふふ……。タロータ、あのおじさん、君が生きてるか、って聞いているよ」

「生きてるね」

「だよ。死ぬのは、あのおじさんの方だよ」

「うん。あいつ、死ぬね」

カタカタカタと口を鳴らしながらしゃべるタロータ。

男の声は低く、タロータの声は高い。

脳天から出るような甲高い声は子供の声だが、口から出る言葉は恐ろしい。

店主は包丁を前に突き出し、

「来るな！ 近寄るな！」

と牽制した。

「来るな、だってさ。……だったら、近寄ろうか」

「うん、そうだね」

男が一步前に進んだ。

店主は涙目になりながら、

「や、やめてくれ〜」

と包丁を振った。

「やめてくれ、だってさ。やめるわけないのにね。あのおじさん、可笑しいね」

「きゃはははは〜」

タロータが笑いながら全身を震わせた。

けたたましい笑い声と身体中から出るカタカタカタという音とで、場は異様な雰囲気にも包まれた。

「ひゃ〜！ 勘弁してくれ〜」

店主が頭を抱えた。

「じゃあ、お金を払ってもらおうか。それで勘弁してやろうか。いいよね？」

「うん、いいよ」

それを聞いた店主は別室に飛び込み、慌てて戻ってきて、二十両の金を手渡した。

「ふふふ、じゃあ、もらっていくぜ……」

男は紙切れを残して店の外に出て行った。

一部始終を見ていたキューピットも、「お金、置いとくね」と食事代をテーブルに残し、店を飛び出した。

『凄いや。本当に凄いや』

キューピットは男を追いかけた。

何か目的があって男を追っているのでは無い。

男とタロータのコンビに無限の可能性を感じた。

未知の世界への扉が目の前に有る、と考えながら男の背中を追いかけていた。

男は町の中心街にある高級アパートの中に入った。

キューピットは、この建物に一度だけ書類の配達をしに来たことがあり、その時の記憶では、建物の中には扉付きの個室が沢山あって、各部屋の中は見えない。書類の宛先には部屋番号が書かれており、各部屋の扉にも番号が書かれていたので、書類の番号が書かれている扉をノックしたら部屋の中から受け取り人が現れた。受取書にサインを書いてもらっている間、じっと部屋の中を見ていて分かった事は、ここは住居兼事務所である、という事だけだった。

……とにかく中に入ろう……

建物の中に入って見た。

入口から真っ直ぐに廊下が通っており、その左右に扉が並んでいる。

キューピットはゆっくりと廊下を進みながら、左右の部屋の中からもれてくる音を探った。

一番手前の左右の部屋、一号室と二号室からは何の物音もしない。無人のようだ。

先に進み、三号室、四号室の様子を窺ったが、どちらも人の気配がない。

その先に進み、五号室の前に立つと、中から「カサカサ」という音が聞こえてきた。

書類を扱いなれているキューピットには、それが紙を擦る音だと分かった。

……ここか？……

部屋の中の人物は書類を触っている。

先ほど仕事を終えた取立屋が、報告書を書いているのか、それとも次の取立てに備えて計算書を書いているのか、そんなところなのかも知れない。

キューピットは、「コンコン」と扉をノックした。

返事が無い。

もう一度、「コンコン」とノックをすると、

「誰だ！」

鋭い声が扉に突き刺さった。

聞き覚えのある低い声だ。

……あの男だ……

そう確信したが、さて、どうしたものか？

彼の芸についていろいろと教えてもらいたいのだが、まずは部屋の中に入らなければならない

。

「おい！」

と催促され、キューピットは『ええい！ ままよ！』、

「あの～……メッセージを賜っているのですが……」

と扉の向こうに話しかけた。

「なに！？ メッセージ？ …… どんなメッセージだ？」

「ごめんなさい、他の人に聞かれたくないので、中に入れて下さい」

とキューピットが応えた。

しばらく沈黙があり、ガチャガチャと音がして扉が開いた。

男は剣を持っていた。

「メッセージとやらを聞こうか」

長身瘦躯の男は鋭い目つきでキューピットを睨んだが、キューピットが緊張している様子なので、目つきを和らげ、「おじさんは忙しいから、早く言ってくれたら助かるんだけどな」と、子供に接するように優しく言い、剣を武器立てに仕舞った。

『しめしめ』

キューピットは大きな瞳をきらきらさせ、「おじさん、ありがとう」と言ってから、片膝をつき、

「あ〜……ニヒルな貴方が、この私を狂わせるの……」

と言った。

「なに〜!？」

男が一步下がる。

キューピットは構わず続ける。

……この前、町で貴方様をお見かけして、わたしは貴方のとりこになりました……

……貴方がわたしに近づくたびに、わたしの胸は高鳴り……

……わたしは恥ずかしくて、顔を背け……

……でも、どうしても貴方の方を見てしまう……

……そんなわたしに全く気付かない貴方……

……にくらしいお方……

キューピットは両手を広げ、

……わたしから離れていく貴方の背中を、じっと見詰め……

そして顔を伏せ、頭を左右に振りながら、

……わたしは思った。貴方無しでは生きられない、と……

「これが賜ったメッセージです」

キューピットが終了を伝えると、男は、

「う〜ん……何て応えたら良いのやら……」

と腕組みをしてから、

「誰からのメッセージだ？」

と聞いてきた。

「ソニヤ様からです」

「ソニヤ? …… 知らないな」

「そりゃそうです、この前、初めて街ですれ違ったのですから」

「そうか……」

男は「う〜ん……」と唸りながら次の質問を考えている。

そのチャンスに、キューピットは、

「あの〜……。あの人形は何ですか？」

と長椅子に横たわっている人形を指差した。

「あれか。あれは、俺の相棒だ」

「ただの人形ですよ」

「いや、違う。あいつは生きている」

「ええ～、嘘だ～。……いくら僕が子供だからって、人形が生きているなんて、信じられないよ～」

キューピットは両手の平を広げ、目の前で大袈裟に振ってみせた。

男は、一瞬むっとした顔になったが、直ぐに表情を和らげ、

「信じられないのも、無理ないか……」

長椅子に歩いていき、人形を起こし、左腕に抱えてから、

「あの子、君が死んでる、って言ってるよ」

と人形に話しかけた。

「失礼な！」

人形がしゃべった。

キューピットは男の口元をじっくりと、かといって、さりげなく見張っていた。

少し開いた唇に震えのような動きが微かにあったが、男がしゃべったように見えなかった。

『もしかしたら、どこかに誰かが隠れているのか？』

辺りをきょろきょろしているキューピットに向かって、

「僕は、タロータって言うんだ、君の名は？」

と人形の声がした。

「あ！？ 僕はキューピット」

「よろしく！」

人形が手を伸ばしてきた。

「えへへ、よろしく」

キューピットは人形の手を握った。

木の感触が伝わってきた。

「さてさて、どうするかな？……。俺は、ソニヤに返事をすべきか？」

「そうですよ。でないと、ソニヤさんは自殺するかも知れません」

「そうか……では、まず自己紹介からいくか……。俺の名は、シャーマン。某アカデミーで演劇の講師をしている……」

この後、学歴は有るし収入もまあまあ有る、学生から信望が有り、将来は学部長か学長かと噂されている、などと続き、「身長は普通かな」と言うのがなかなか憎らしい。全ての話が控えめであると匂わせているのだが、キューピットには、全ての話がうそ臭く聞こえてきた。

「次に、ソニヤさんへの想いを語ってくれませんか？」

キューピットが自己紹介を打ち切らせると、

「そうだな……なんて言うか、どうなんだろうね……。困ったね……」

顔に似合わずシャイに照れている。

「分かった！ おじさんも、付き合ってもいいかも知れない、と言う事なんだよね！」

「まあ、そういう事かな」

「じゃあ、早速、ソニアさんに伝えるよ。きっと喜ぶよ！」

「そうかい。宜しく頼むな」

男はキューピットに、「これは駄賃だ、遠慮しないでとっておけ」と銀貨一枚を手渡した。

「おじさん、ありがとう」

キューピットは部屋を飛び出した。

銀貨一枚は金貨十分の一枚に相当する、つまり、十分の一両だ。子供の小遣いには多いが、愛のメッセンジャー代には安すぎる。

「ちえ！ しけてやんの」

キューピットは舌打ちした。

シャーマンと架空のソニヤとの愛の伝令をしている間、何度も芸を見せてもらった。
そして気付いた。

人形のタロータがしゃべる時に、必ずシャーマンの口が少し開かれ唇が震えている。

タロータの口が大袈裟にパクパク動くので、そちらの方を見てしまいタロータがしゃべっているように見えるが、目をつむれば、声はシャーマンの方から出ている。

『やはり、シャーマンがしゃべっている』

確信を深め、独自にタロータ人形を密かに作り、家で特訓した。

師匠の口の動きは全て記憶している。

その口の動きを真似ているうちに、かなり上達したような手ごたえを感じてきた。

ある日、いつものようにソニヤのメッセージをシャーマンに伝えたと、

「そろそろ、ソニヤとのデートをお膳立てしてくれないか？」

シャーマンが頬を赤らめた。

「え！？ 会うの？」

驚くキューピットに、

「へへへ、俺も、ソニヤの事が好きになっちゃった。へへへ……」

と、照れ笑いしている。

……とうとう、この日が来たか……

キューピットが愛のメッセージを伝えていると、必ず両想いになる。

シャーマンには、出来るだけ引き伸ばそうと手加減してきたが、とうとうこの日がやってきた

。

「分かった！ じゃあ、デートの日と場所を考えなくっちゃね」

キューピットは懐から紙を取り出し、「おじさんの空いてる日は？」と聞いた。

「俺は、二、三日前に言ってくれれば何時でもいいよ」

「場所はどうしよう？ 美術館が良いかな？」

「う～ん、堅っ苦しいな……。居酒屋なんてどうだい？」

「いいね！ ソニヤさんも、お酒が好きなんだ」

「へへへ、そいつは良かった」

「ねえ、ちょっとお茶でも飲まない？ 僕、わくわくしてきて、喉が渴いちゃったよ」

「おっしゃ、ちょっと湯を沸かしてくるわ」

シャーマンはアパート内にある共同炊事場に向かった。

その隙に、キューピットは机の上の書類入れから紙を一枚抜き出し、懐に入れた。

シャーマンが、湯気の噴出すヤカンを持ってきたので、二人はお茶を入れて飲みながらデートプランを練った。

「ソニヤさん、きっと喜ぶよ」

「おう！ 上手に言ってくれよ、頼むぜ」

シャーマンは一両を奮発した。

それ以降、キューピットがシャーマンの家を訪れる事は無かった。

ある館で、女主人が従者達を怒鳴りつけていた。

「シャーマンはまだか！？ いったいお前たちは何をしているのだ！ 早く、シャーマンを連れて来い！」

この女は、ゼウスの正妻、ヘラ。

かつては絶世の美女と呼ばれていたが、ゼウスと一緒にってから何処かタガが外れたのであろうか、性格も風貌も荒れすさみ、今や鬼女のようになっている。

太い腕で「どうじゃ？ どうじゃ？」と男達の首を絞め、苦悶の表情を楽しむ。

太い足で「どうじゃ？ どうじゃ？」と男達を踏んづけ、骨の軋む音を楽しむ。

巨人一族の血は流れていないが、ヘラの体躯は常人を超越していた。

「え〜い！、この野郎！ 早く、シャーマンを連れて来ないか〜！」

床に叩きつけられ悶絶する者が一人増えた。

従者達は大慌てで各部署に走る。

一刻も早くシャーマンを見つけなければ、次は自分が生贄になるかも知れないと、恐怖に駆り立てられるのであった。

その数日前の出来事、

「ふふふ〜ん」

と、鼻歌交じりに酒場の扉を押したキューピットは、「ギ、ギー」と扉が開くのを確認した後、顔をこわばらせ目を細め眼光を鋭くした。

『おっしゃ！ 行くぜ、タロータ！』

気合を入れ、思いっきり扉を蹴る。

「やい！やい！やい！、ここの主人はどこに居る！」

凄みを利かせ酒場に足を踏み入れたキューピットを出迎えたのは、この町に巢食う良からぬ連中、連中。

数十人が鈴なりになって、煙をくゆらせ、酒を飲んでいる。

彼らが一斉にキューピットに視線を浴びせた。

「おいおい、ミルクは置いてないぜ」

「お父〜ちゃ〜んなら、あさって来たぜ」

からかいの言葉に動揺したキューピットは、「へへへ」と愛想笑いをしてから、

「あの〜……。バッカスさんは居ませんか？ 居ないですか？ そうですか」

急いで帰ろうとした。

「こら〜、待たんか。わしがバッカスじゃ」

カウンターのはるか上から声がした。

見上げると、雲をつくような大男がカウンター越しにキューピットを見下げている。

「わしに用か？」

目を細めながらグラスを磨いている男は、黒々とした口ヒゲと顎ヒゲをたっぷり蓄えており、大きな鼻、大きな顔、ふさふさと茂った縮れた頭髪など、百獣の王ライオンを彷彿とさせる。

酒場の主人というより、悪人達の親玉と言った方が似合いそうな人物であった。

「わしに用か？」

磨き終えたグラスを傍らに置き、両手をカウンターについたバッカスは、カッ！、と目を見開いてキューピットを凝視した。目玉も特大サイズだ。

「えへへ……」

キューピットは懐に入っている『酒代二十両、三ヶ月利息六十両、取立手数料八十両、合計百六十両』と書かれた計算書を、ギュッと握り締めた。

この計算書はシャーマンの家から盗んだ紙だ。

練習の成果を試そうと盗んだ一枚が、よりによってこんな恐ろしい取立案件とは……

これを懐から取り出す勇気は無い。

この紙は、計算書であるが、同時に果たし状でもあるのだ。

緊張しているキューピットは、「えへへ……」と愛想笑いをしたまま固まっている。

「おい！、その薄ら笑いを止めんか！」

バッカスの一喝で、店の客達はシーンと静まる。

キューピットは頬が引きつり、口の形だけ愛想笑いのまま固まってしまった。

「何の用だ！ 早く言え！」

バッカスが握った拳にハァ〜っと息を吹きかけたのを見て、キューピットは正気に戻った。

「あ！ バッカスさん！ お会いできて幸せです！」

思わず口をついて出た。

「ほお〜？、そうか？」

「はい！ とても幸せです！」

何も考えていない。

口に任せるしかない。

「あの〜……。僕はお金が欲しいんです、それで……」

「それで？……」

「え〜っと……それで……」

もしかして、今が計算書を見せるチャンスかも……。と浮かんだが、

「僕の芸を見てください」

口が勝手にしゃべった。

「なんてえ、ひどい仕打ちなんだ！」

「許せねえ！ この悪女！」

観客から怒りの声が上がった。

「妾の分際で、わしの言う事が聞けぬと申すか！」

キューピットは椅子に座り、左腕に抱えたタロータの頭を、右手で叩いた。

「あっ、れ〜……」

身体をカタカタと鳴らしながらテーブルの上に、よよと泣き崩れるタロータ。

「泣いて済むと思うのか！ 馬鹿め！」

キューピットがタロータを叩く。

タロータは身体をカタカタと鳴らしながら、ただひたすらに耐えるだけ。

時々、「ああ〜 ゼウスさま ああ〜 ゼウスさま……」と声を出している。

酒場でキューピットは人形劇を披露していた。

この劇では、キューピットがゼウスの正妻である『ヘラ』の役を、タロータが『レト』という女性の役を演じている。

浮気性のゼウスは、沢山の愛人を囲っている。

レトもその一人で、ゼウスの子を身籠り、出産が間近になってきた。

ヘラは、愛人が夫の子供を産むのが気に食わない。レトを屋敷に監禁し、子供を墮ろすよう迫った。しかし、レトは頑なに拒否し、隙を見てヘラの屋敷を逃げ出した。

その後、レトは各地を逃げ回り、何とか無事に出産する。

産まれたのは、『アポロン』という男の子と、『アルテミス』という女の子。

二人は健やかに成長し、今ではゼウス軍の将校になっている。

キューピットは、ヘラのレトに対する仕打ちの部分演じているが、これは彼の創作である。人々の噂話にヒントを得て、口が動くままに話を進めている。

「え〜い！ 子を墮ろさぬというのか！ ならば、このわしが墮ろしてくれよう！」

ヘラがレトの腹を叩いた。

「あっ、れ〜……」

レトがカタカタとおののく。

「お前が憎い！ 殺してやる！」

さらにヘラが拳を振るおうとした時、

…… こら、止めんか ……

どこからか威厳のある声がした。

「誰だ！ 何処に居る！」

ヘラが辺りをきょろきょろすると、

…… わしは、ゼウスじゃ ……

と何者かが答えた。

「ああ～……ゼウス様～……」

レトの身体はカタカタと歓喜に震える。

それを見てヘラは、「喜ぶな！」と拳を振り上げた、その時、

…… 馬鹿者！ ……

という声と同時に、ヘラが身体を震わせた。

「くっ！ わたしに電撃を浴びせるとは、なんという仕打ち……」

喘ぎながら、

「この恨み、いつか晴らしてくれようぞ……」

ガクッと、テーブルの上に崩れた。

…… 逃げろ、レト ……

ゼウスが言った。

「はい……でも、その前に……」

レトは身体を起こし、「えい！ え～い！」とヘラに頭突きを食らわせた。

レトの身体がカタカタカタと鳴り、ヘラの頭がゴン、ゴンとテーブルを鳴らす。

「ゼウス様、ありがとう。わたしは素晴らしい子を、きっと産みます……」

レトは天を仰ぎ、カタカタカタと身体を震わせた。

……

「このようにしてレトは難を逃れ、アポロン、アルテミスが誕生した……」

と語りながらキューピットは身体を起こし、

「めでたし、めでたし」

と、タロータと一緒に頭を下げた。

「いや～～、良かった～！」

「面白かった！ こんな、初めて見たぜ」

テーブルの上に凄い勢いで銀貨が積まれていく。

それをキューピットが麻袋に詰めていく。

ずっしりと、嬉しい重さになってきた。

「なあ坊主、この芸は何と言うんだ？」

誰かが尋ねた。

キューピットは少し考え、

「シャーマンの秘儀」

と答えた。

シャーマンから教わった技であるし、シャーマンには負い目を感じている。

彼の顔を立てるのが、お礼であるし、罪滅ぼしにもなるのだろうと思った。

「シャーマンか……凄い芸だな……」

皆が余韻に浸る中、

「じゃ、僕はこれで！……遅くなると、お母さんに叱られる！」

キューピットは店を飛び出した。

背中に「また来いよ！」という声を受けながら、
『これは儲かるわ』

キューピットは、ほくそ笑んだ。

「なに！ シャーマンを捕らえたか！ 連れて来い！ すぐに此処に連れて来い！」

ヘラが、歯をギリギリと噛み、拳をギュッと握り、玉座から腰を半分浮かした。

「こやつです」

衛兵が玉座の前にシャーマンを引っ立て、座らせた。

訳が分からぬまま連れてこられたシャーマンの左腕にはタロータが抱えられている。彼らは、取立を終えた帰り道で捕まり連行されたのだ。

ヘラの目には、怒りの炎がメラメラと燃え上がっている。

その目を見てシャーマンは青ざめた。

『取立依頼のような話だったらまだ良いのだが、と期待したが……甘かったか……』

期待は泡のように儚く消えた。

『しかし、俺はヘラ様に何もしてないぞ！ きっと何かの間違いだ！』

シャーマンは、すぐに誤解が解けるだろうと思った。

「お前がシャーマンか？」

ヘラが尋ねた。

「はい。そう……、そうでございます」

顔を伏せたままシャーマンが答えた。

ヘラの威圧感に声が震えた。

「ふふ、そうかお前がシャーマンか、やっと会えたな……」

感情を押し殺した声から、憤怒を感じる。

「わたしの悪口を、あちこちでふれ回っているそうだな……」

ヘラが玉座から立ち上がった。

「え！？ そのような事は身に覚えがありません！」

シャーマンは驚き、即座に否定した。

居酒屋で人々がヘラの悪口を言う与太話は何度も聞くが、自分からそんな話をしたことは無い。だいいち、一緒に飲む友達など一人も居ないのだから。

「ふん、とぼけおって……」

玉座から離れ、ヘラが近寄ってくる。

「断じて！ 身に覚えが無い話です」

シャーマンはもう一度否定した。

しかし、ヘラは無視して、

「シャーマン劇などと申して、その人形を使い……」

ゆっくりと近づきながら、

「面白おかしく、話を捏造して……」

拳を握り締め、

「わたしを馬鹿にして、大笑いする」

シャーマンの前に立ち、目をギラギラさせた。

「この～！」

シャーマンに蹴りが入った。

タロータ人形と共に吹っ飛ぶシャーマン。

シャーマンは歯を食いしばり顔をしかめ、タロータは身体をカタカタカタと鳴らす。

「お前のおかげで、わたしはいい笑いものだ！」

また、蹴りが入った。

腹を蹴られたシャーマンは、「ぐっ」とうめいた。

「ふふふ、痛がるのはこれからだぞ」

ヘラは、壁際に用意されていたハリツケ柱にシャーマンを縛り付けた。

血が付いていないハリツケ柱は、シャーマンの為に用意した新品なのだろう。

最初から処刑を決めていたのかも知れない。

「この野郎～！」

鞭が「ヒュッ」と走り、左のわき腹が「バチッ！」と鳴った。

シャーマンは歯を食いしばった。

「え～い！ 誰かに頼まれたのか！？」

次は左の肩に鞭が走り、「ビシッ！」と音を立てた。

「だ、誰にも……な、何もしており……」

「ええ～い！ 嘘を言うな～！」

シャーマンの言葉をさえぎり、ヘラが鞭を振るった。

左の頬が叩かれ、口から血しぶきが飛び出した。

「ふふふ……もう、血が出てきたか……案外、薄い皮だな」

ヘラはハリツケ柱の前を、右に行ったり左に行ったりと、うろうろしてから、

「ここか～！」

と、右足を狙った。

逆モーションで振るわれた鞭は、床を跳ねてから足に当たった。

「むう……腕が鈍っているか……」

ヘラは着ていたローブに右手の平を擦りつけ汗を拭った。そして鞭の持ち手をしっかりと握りなおし、もう一度逆モーションで右足を狙った。

「ピシッ！」

今度は右足に命中した。

「ふふふ……練習させてもらうぞ。それぐらいしてもらわねば、な……ふふふふ……」

昼過ぎから夕方まで、責めは三時間以上続いた。

ヘラが去り、玉座の間に一人残されたシャーマンは、ハリツケ柱に縛られたまま、ぐったりとしている。身体中、まんべんなく傷が付き、その傷が腫れあがっている。

ヘラはシャーマンの身体に、傷が付いていない部分を見つけては、そこを狙って鞭を走らせた

。最初のうちは遠く離れた所を叩いていた鞭も次第に近くを叩くようになり、夕方になる頃には狙った所を正確に叩くようになった。そして、身体の全てが傷で埋め尽くされ無傷な部分が無くなった時、ヘラは鞭を置いた。

……嵌められたか……

誰かの罠に嵌まったのだと、シャーマンは思った。

シャーマンから金を取り立てられた連中が、シャーマンに恨みを抱くのは当然だ。

その中の誰かが復讐を決めたのかも知れない。

シャーマンの名前は一般には知られていないが、しゃべる人形を連れている、という大きな特徴が有るので、知ろうと思えばすぐに知れる。別の取立屋に聞けば多分教えてくれる。取立屋にとって成績の良いシャーマンは邪魔な存在だから。

あとは、『シャーマンという男が人形を使い、ヘラ様の悪口を言いふらしている』という話を作って広めるだけ。この話がヘラの耳に届けば、頭に血がのぼりやすいヘラなら、調べるより先に処刑を決めるだろう。

そして、その通りになった。

と、シャーマンは考えた。

……死ぬまで打たれるのか……

救いようのない絶望感の中、シャーマンは眠りについた。

翌日。

朝から鞭打ちが行われている。

「ほら！」

鞭が肩を打つ。

「ほら、ほら〜！」

鞭が胸を打つ。

シャーマンの胸の皮膚が大きく裂け、どっと血が噴き出した。

「誰の命令なのだ！？ 言わないともっとひどい目に遭うぞ！」

ヘラが手を休め、シャーマンの顔を覗き込んだ。

意識が消えかけているように見えた。

「ちっ！ つまらん奴！」

ヘラが鞭を握り直し、「目を覚まさせてやる」と振りかぶった時、

「タロータ……お前は、大丈夫か……」

シャーマンが呻いた。

「タロータ？……なんだそれは？」

突然の言葉にヘラは手を止めた。

「タロータ……わたしの人形……」

うわ言のような呻き声を聞き、ヘラは傍らに置いてある人形を見た。

「この人形がタロータか？」

「わたしの大切なタロータ……お前を残して、この世を去るのが残念だ……」

シャーマンがつぶやいた。

「これは只の人形だろう」

訝るヘラに、

「生きている……命がある……」

とシャーマンが答えた。

「くくく……お前は馬鹿か」

ヘラが鞭を飛ばし、タロータを叩く。

「きゃ〜！」

タロータが悲鳴を上げた。

「なんと〜……」

ヘラは驚き、左手で胸を押さえた。

「これがお前の大切な人形か？」

「わたしの大切な連れ合い……」

「くくく、連れ合いとな……」

視線をちらちらさせ、シャーマンとタロータを交互に見比べていたヘラは、

「叫ぶ人形か……こいつの方が面白そうだな」

タロータを顎で指し示した。

「ああ～……なんて事だ……」

シャーマンは嘆いた。

……

「ふふふ！ どうじゃ！ どうじゃ～！」

嬉々として鞭を振るうへら。

「きゃ～！」

カタカタカタと身体を震わせ、甲高い悲鳴を上げるタロータ。

「誰じゃ～！ 誰が黒幕じゃ～！」

「し、知りませ～ん！」

「嘘を言うな！ 全部分かっておるぞ！ お前の嘘は分かっておるぞ～！」

渾身の力を込めて鞭を振り下ろすへら。

「ぎゃ～！」

絶叫するタロータ。

「言え！ 言え！ 言え～！ 誰の差し金じゃ～！」

「言います！ 言います！ 言います～！」

「黙れ！ 黙れ！ 黙れ～！ この野郎～！」

ゼイゼイと息を切らし、へらは狂ったように鞭を振るう。

タロータは身体を震わせ悲鳴を上げ続ける。

夜になり打ち疲れたへらは、「こいつ、喜ばせてくれるな～。また明日来るぞ」と言い残し部屋から出て行った。

タロータの横でハリツケにされていたシャーマンは、

……ああ、疲れた……

がっくりと頭を落とした。

それから数日間、鞭打ちが続いた。

ヘラはよほどタロータが気に入ったのか、飽きもせず鞭を振るい続ける。

シャーマンは疲れており、時々、些細な悲鳴のタイミングズレを起こしたが、ヘラは気が付かない様子だ。

そして、タロータだが、カタカタカタという音と同時に、ギシギシと軋む音が聞こえだした。かなりガタがきている。

鬼女のように思われたヘラは案外冷静で、「おい、シャーマン。この、声が出る人形は大丈夫か？ 壊れるんじゃないか？」と聞いてきた。そしてシャーマンが、「修理させて下さい」と申し出ると快く了解してくれた。

最近のヘラは機嫌が良く、屋敷内の雰囲気も良くなっている。

直ぐにへこたれる人間と比べて、タロータは丈夫だ。気が済むまで打ち続ける事が出来る。おまけに、カタカタカタと身体を震わせ、甲高い悲鳴を上げるけたたましさが、興奮を誘う。タロータは鬱憤の発散相手に最適であり、人を打つより面白い餌食だった。

側近達も、ヘラの機嫌が良いので恐れることなく近寄り世話を焼くことが出来る。昔、ゼウスと結婚した頃のヘラは、美しく優しく貞淑な女性であり、そんな女性に仕える事を誇りに思い喜んでいた。しかし、暫くしてヘラは狂ったように凶暴になり、少しでも不興を買えば殴る蹴るの暴力を振るうようになった。毎日、命の縮む思いで仕えなければならなくなってしまった。シャーマンが来てから、ヘラは優しくなり昔のヘラのように自分達に接してくれる。シャーマンには気の毒だが、彼が犠牲になって、このままの状態が永遠に続いてくれれば幸せだ、と思っているようだ。

一方、シャーマンは、数日振りに縄を解かれ、ベッドが備わっている牢屋に連れて行かれた。

そして、囚われてから初めての食事を与えてもらった。

久しぶりの食べ物を前にしても、食欲が湧かない。

食べなくてとはと、食べ物を胃に押し込んでいると、吐き気がしてきた。

波打つ胃を、腹を押さえて鎮めようとしたが、下から上に突き上げるような胃の動きは激しくなるばかり。息が苦しくなり、口を開け、喉を開いて呼吸をしていたら、大きく開いた喉から一気に胃の内容物が噴出した。

「だいぶ弱っているようだな」

シャーマンに声をかけた牢番は、大きな入れ物にたっぷりと水を入れ、「これでも飲んでおけ」とシャーマンに差し入れてくれた。

「助かる」

シャーマンは礼を言い、水を数口飲んだ。

食べ物に異様な感じはしなかった。胃が弱っているのだろう。水を飲み、たっぷり睡眠をとれば体調は良くなる。しかし、

……ゆっくり寝てられないだろうな……

タロータの状態は酷かった。

多くの木片が割れ、砕け散り、木片どうしを繋げているピアノ線が伸び切っている。

木片は適当に調達できるが、ピアノ線は特注しなければならない。

修理を三日以内に終わると命令されているが、ピアノ線が間に合うかどうか、とりあえずピアノ線をゼウスの町の鍛冶屋に注文するよう依頼し、ピアノ線が届くまで木片の削り作業をすることにした。

「え！ シャーマンさんが、ヘラの屋敷に囚われているの？……」

双子の兄弟が経営している鍛冶屋で、キューピットはシャーマンの苦境を知った。

キューピットは、鍛冶屋から、

「ヘラの屋敷の者が来て、「タロータという人形用のピアノ線を急いで作ってくれ」と言われた。以前に作った事が有るので即座に了解したが、「二日以内に屋敷に届けてくれ」と言われ、「それは無理だ」、「いや何とか頼む」、と押し問答になった。そこで、急ぐ理由を聞いてみたら、「シャーマンという男が囚われており、彼の人形のタロータが鞭打たれボロボロになった。もし、タロータが直らないと、次はシャーマンが拷問を受け、多分すぐに死ぬだろうから、そうなったら今度は自分達が拷問を受ける。だから、自分達の命を救うと思って、急いでピアノ線を作ってくれ」と泣いた」

と教えてもらった。

「え～、なんでシャーマンさんは囚われたの？」

「いや、そこまでは聞いていない。とにかく急がなくっちゃ。悪いが話している時間が無いので、愛しいマリアのメッセージは今度聞くよ。悪いね」

鍛冶屋に追い返され、キューピットは、帰路をとぼとぼと……歩きながら、

……シャーマンさんが囚われた理由は何だろう？……

……あの人、バカスのような恐ろしい相手でも、取立相手に入れてるからな……

……ヘラ様相手に取り立てに行ったのかな？ きっと、そうだろうな……

……それはそうと……

……タロータは鞭打たれボロボロになったって、言ってたよな……

……いくら修理したって、木で出来た人形が鞭打たれば、直ぐに壊れる……

……だから、直ぐに修理できれば良いんだけど……

考えを巡らせていた。

『あ！、いい手がある。僕のタロータ人形をシャーマンさんに渡せば良いんだ！』

一つを修理している間に、もう一つを使う。これでまかなえそうだ。

いざとなったら、さらにもう一個作れば良いんだし。

そう考え、キューピットはタロータ人形を抱え、ヘラの屋敷に向かった。

「ほう。別のタロータ人形か……この人形は、ちゃんとしゃべれるんだろうな？」

門番が聞いてきた。

「しゃべれるけど、どうして？……人形を鞭打つだけなんですよ？」

「馬鹿を言え！、カタカタカタと鳴って、最高の悲鳴を上げなきゃ、ヘラ様が怒るぞ！」

「へえ～……」

キューピットの脳裏に、タロータの横でシャーマンが声を作っている様子が浮かんだ。

「で、この人形は、ちゃんとしゃべれるんだろうな？」

門番は疑いの目をした。

「タロータ、お前、疑われてるよ」

キューピットがタロータに話しかけると、タロータは口をカタカタ鳴らし、
「何だって!？」

と門番に顔を近づけた。

「わ、分かった! 通って良し! 早く行け!」

門番に急ぎ立てられ、従者と一緒にキューピットは屋敷の中に入った。

玄関ホールには立派な彫刻やきれいな絵画が沢山飾られており、さすが、ゼウスの妻だと感心した。これらの価値は分からないけど、壊してしまったら自分の命を何個も捧げて償う必要がありそうだ。そう考えると、こんな所で働くのは御免だな、と思った。

牢屋に案内され、ベッドに横たわってぐったりしているシャーマンを見た時、キューピットの目から涙がこぼれた。

もともと細かったシャーマンがさらに痩せ、枯れ枝のようになっている。そして、身体には無数の傷が有る。傷からの出血は止まり、少しずつ癒えようとしているが、これだけ傷が多ければさぞかし痛むだろう。

黙って佇む、キューピット。

シャーマンに、声をかける事ができないでいる。

せっかく寝ているのに、起こすのが可哀相だという躊躇もある。

それに、何て言葉を掛けて良いのやら、掛ける言葉が全く浮かばない。

タロータ人形がもう一体あれば、シャーマンは無傷でおれると簡単に考えていた。しかし、彼は必死にタロータの声を出している。彼の声が出なくなったら、それで終わりだ。人形の差し入れだけじゃ彼は救われない。

ぐったりしているシャーマンを見つめ、自分が彼にした悪行の数々を思い出し、
『もっと役に立つ何かをしなければ。……でないと、罪滅ぼしにならないよ……』

キューピットは持ってきたタロータ人形を牢番に預け、黙って出て行った。

廊下を歩きながら、従者が言った。

「しかし、あの二人も大胆だねえ。ヘラ様をあざ笑う人形劇をするんだから……」

「え!？ あの二人って、シャーマンさんとタロータ?」

「ああ、二人して、酒場で、人形劇の興行を打ってたそうさ」

従者から聞き、シャーマンにもう一つ悪行を行ったことを知った。

それが最悪の結果を招いたことも。

『絶対、シャーマンさんを助け出すぞ!』

キューピットは固い決意を胸にした。

「キューピット、お前、本当に大丈夫か？」

「大丈夫！ 完璧！」

「兄貴〜……おいら、これは危ないと思うよなあ〜……」

「うるせえな、キューピットが大丈夫って言うてるんだから、きっと大丈夫だ！」

鍛冶屋の兄弟が、人形を担ぎ、ヘラの屋敷の前に到着した。

「何だ？ それは？」

門番が尋ねた。

「へい、キューピット人形です」

鍛冶屋の兄が答えた。

「ふ〜ん……。で、誰に渡す？」

「シャーマン様です」

「シャーマンかあ〜……あいつ、どんどん衰弱していくな。もう長くなさそうだし、どんどん差し入れしてあげな」

あっさり門を通過し、従者の案内で玉座の間に通された。

「ヘラ様、この者がシャーマンへの差し入れだと申して、これなる人形を持参しました」

従者が頭をたれた。

「ふん？ 何じゃそれは？」

ヘラの問いに、兄が、

「はい、ヘラ様。これはキューピット人形と申して、タロータ人形をグレードアップした物で御座います」

と答えた。

「はあ〜、なるほど。全部金属で出来ておるのか。これは丈夫そうじゃの」

「はい！、丈夫で長持ち。うちの鍛冶屋で作りました」

「ほお、お前達で作ったのか。……では、あそこに縛ってあるタロータ人形の代わりに、この人形を縛り付けろ」

ヘラの命令で、鍛冶屋の兄弟はキューピット人形を縛り付けた。

その作業の最中、兄はシャーマンに、「あんたは声を出さなくていいから、黙っててくれよな」と小声で話した。

ヘラは縛り付けが終わるや否や、ヒュ！、と一発、鞭を振るった。

ズド！、という音と同時に、「…ゃ〜！」という悲鳴が聞こえた。

「ん？」

ヘラは首をかしげ、「ちょっと弱かったかな？」と、今度は渾身の一撃を振るった。

ボン！、という音と同時に、「…ゃ！ぎゃ！」という悲鳴が聞こえた。

「ふ〜む……音がこもっておる。なんだか布団を叩いているような感じだ。悲鳴も、声が遠いな」

「はい！、左様でございますね。わたくしも、何だか違和感を感じております」

「調整できるか？」

「はい、どこか、個室を貸して頂ければ調整してみます」

「ふふふ……」

ヘラはニヤリと笑い、

「企業秘密と云うやつか……。了解したぞ」

と倉庫を貸してくれた。

「おい、キューピット。ヘラの言葉を聞いただけ、どうすんだよ」

「大丈夫、何とかなるよ。……それより、早く脱がせてよ」

鍛冶屋の兄弟は、人形の頭、次に胴体、さらに手足を脱がせた。

すると、身体中を綿まみれにさせたキューピットが出現した。

「綿を減らせばいいんだ。綿が多すぎて、全ての音がこもるんだよね」

キューピットが言うと、弟の方が、

「え～、おいら嫌だよ。痛いじゃないか」

と反対した。

「うるせえな。これが役に立たなきゃ、シャーマンは死ぬんだぞ！」

「あ！、そりゃ、兄貴はいいさ。おいら、キューピットと交代で入るんだぞ。おいらの身になってくれよ」

「いいから、いいから、後でいい事が有るから、我慢しなよ」

「ちえっ！」

弟は口を尖らし、キューピットが綿を抜き、抜いた綿を兄が麻袋に詰める作業を見ていた。

「え～！……綿がなくなるじゃん！ もう、やめてよ～！」

ほとんど綿が取り去られた人形の殻を見て、弟が悲鳴を上げた。

「もう、いいんじゃないか？」

さすがに兄も、弟に賛成する。

「よっしゃ！ じゃあ、着せて」

兄弟の手伝いで殻を着せられたキューピットは人形になった。

……

「どうだ！」

ヘラの鞭を受け、ガーン！、と鳴り、「きゃ！、きゃ～！」と悲鳴を上げる。

「おりゃ！」

さらに鞭を受け、バーン！、と鳴り、「ぐえ！、ぐわ～！」と悲鳴を上げる。

キューピット人形が試し打ちされた。

「うん！、場所によって音が変わり、楽しいな。それに、声に元気が有って、良い！」

ヘラは満足そうだ。

「じゃ～あ、我々は一旦帰りますね。また明日も、夕方に来ますから……」

帰ろうとする兄弟に、

「今日のご苦労だったな、これは駄賃だ」

ヘラは百両もの大金を与えた。

「え！？こんなに沢山貰っても良いのですか！」

驚く兄に、

「そんなに大袈裟に言うな。ほんの気持ちだ」

ヘラは微笑んだ。

「兄貴～！ 百両もあるよ～！」

弟の叫びを聞いたキューピット人形が、突然手足をバタバタとさせた。

「おやおや、お前達の作った人形は、まるで生きているようだ。もの凄いバージョンアップだな」

ヘラは嬉しそうだった。

翌日の昼。午前中の鞭打ちを楽しんだヘラは、リビングで昼食を摂っている。

玉座の間では、キューピット人形とシャーマンがハリツケ柱に並んで縛られている。

部屋の中には、この二人以外、誰も居ない。

シャーマンは今日も苦しそうだ。

「ねえ、シャーマン。大丈夫？」

キューピットが声をかけた。

「ああ……。俺がお前の体調を気遣うべきなのに、気遣ってくれてありがとうな……」

シャーマンは声を出すのがつらそうだ。

「僕なら平気だよ。それよりシャーマン、苦しそうだね。本当に大丈夫？」

「大丈夫。俺は強い」

「そうか～、良かった～」

と返事をしたが、このままではシャーマンは死んでしまうと感じた。

声が、虫の息のように弱々しかった。

キューピットが、『何かいい手は無いかな……』と考えていると、突然、

「なあ、ソニヤはどうしてる？」

とシャーマンが声をかけてきた。

「え！？ ソニヤ？」

「彼女、元気にしてるか？」

シャーマンはソニヤが実在していると、まだ思っているようだ。

「うん、ソニヤさん、ずっと返事に悩んでて、それで返事が遅くなって、その後、シャーマンさんが居なくなって、ソニヤさん、自分の責任かも知れないって、悩んでる」

また、嘘をついてしまった。

「そうか、悪いことをしたな……」

シャーマンは、上を見てつぶやいた。

目から光る物がこぼれた。

シャーマンに対して、いったいどれだけの数、嘘の言葉の矢を放ったんだろう。

放たれた矢は、シャーマンの胸に突き刺さり、溶け、今では塊になっている。

胸に出来た塊は、何もしないで放って置けば、ゆっくりと、溶けて流れて出ていく。

そして、塊があった場所に出来た隙間には、別の何かが流れてきて、また塊になる。

無理に流してはいけない。ぽっかりと穴が開く。

大きな塊を無理に流せば、胸の中が空っぽになってしまう。

「なあ……。何でも良いから、ソニヤの話をしてくれないか……」

上のほうをじっと見つめ、何かを思いながら、シャーマンはつぶやいた。

「分かった」

囚われの身になってから、胸にあったいくつかの塊は、かなり萎んでいるだろう。

そこに出来た隙間を埋めるものは、此処には存在しない。

シャーマンは、そこに、ソニヤへの愛を自分で流し込んでいたのかも知れない。

きっと、大きな塊になっていると思う。

でも、まだ沢山の隙間がある。

それを、ソニヤへの愛で一杯にしてやろう。

そう決め、キューピットは語りだした。

……いとしい貴方、貴方は、今、どこに居られますか……

……きっとどこかで、新しい事をされておられるのでしょうか……

……あなたが居なくなって、わたしは寂しくなりました……

……胸にぽっかりと穴が開き、今は、何もする気が起こりません……

……今は、貴方と早く会えば良かったと、後悔する毎日です……

……わたしは、貴方のお誘いに、ためらいました……

……貴方に会うのが怖かったです……

……わたしは、何の取り柄もない、退屈な女です……

……貴方のような都会に住む方と、とても、つりあいがとれる女ではありません……

……お会いして、幻滅され、そして、貴方に去られる……

……それが、怖かったです……

……だけど……

……それは、自分勝手な考えであると、気付きました……

……貴方を縛り付けておきたいと、思っている、自分に気付きました……

……そして……

……決心したのです、貴方にお会いすべきだと……

……貴方に幻滅されるのは、覚悟しています……

……そして、幻滅させてしまうことを、お許してください……

……だけど、わたしの事を少しでもいいから知ってください……

……この時代に共に生まれ、そして偶然に出会った……

……ソニヤという女が居たことを、一瞬でもいいから、知って欲しいのです……

……もし貴方に、会えたなら……

……わたしは幸せです……心に一生の宝物を、持つことができるからです……

語り終え、キューピットはシャーマンを見た。

天井を見上げながら涙の粒をぽろぽろとこぼしている。

ヘラが従者を連れて部屋に入ってきた。

そしてシャーマンに向かってツカツカと歩いて行き、何か言おうとしたが、シャーマンの顔を見て、

「うん？ 何故泣いている？」

と尋ねた。

「いや、何も」

シャーマンが答えた。

ヘラは暫くの間、シャーマンの顔を見ながら、あごに手をあて、「う～ん……」と悩んでいたが、意を決したかのように、突然、

「すまない！」

と、シャーマンに頭を下げた。

「え！？ ヘラ様？」

驚く従者。

「いや、ここはきっちり謝らねば」

ヘラは、横を向き、

「お前も謝れ」

と従者に命令した。

「済みませんでした」

従者も頭を下げる。

「お前から説明しろ」

ヘラに命令され、従者は、「承知しました」と返事をしてから、「じつは……」、「あの、実はですね。貴方が犯人でないと分かったのですよ。済みませんね」と言った。

「もお～……。中途半端はいかん、もっと詳しく説明しろよ……」

呆れ顔のヘラに従者は、「承知しました」と返事をしてから、

「あの～……名前は分からないのですが、どこかの子供が人形を使って、ヘラ様をめちゃくちゃ悪人に仕立て上げた劇をしていたそうで、それも子供のくせに、夜な夜な酒場に現れては、皆に見学料を強要する悪玉で。飽きて来たぞ！って言われたら次の日には、もっと過激な悪口劇を披露する。最後にはとうとうヘラ様、ゼウスの町の間人を全部食っちまうって話になったそうです。それでそのガキが、この芸は、シャーマン様の秘儀だ！、なんて言うから、貴方様が犯人とばかり……。本当にごめんなさいね」

と説明した。

シャーマンの涙は、いつの間にか止まり、涙を流していた目は、じっとキューピット人形を見つめていた。

キューピット人形は、股間に液漏れを起こしている。

しばらく経ってシャーマンは、

「犯人の特徴は分かるか？」

と聞いた。

従者は、

「白い肌に、大きな目、くるくる頭の金髪で、ぽっちゃりしている……それしか……」

と、頭を掻いた。

「そうか……。そこまで分かっているのか、う～ん……」

シャーマンは唸りながら、考えている。

「早く縄を解いてやりなさい」

ヘラの命令で、従者はシャーマンの縄を解き、

「ごめんなさいね、本当に。すみませんね……」

と何度も謝った。

ヘラは、「本当に申し訳ない!」、と頭を下げてから、

「どう、償ったら良いか、何でも言ってくれ。わたしに出来ることなら、何でもする」

と言った。

シャーマンは、

「貴方に謝っていただき、それだけで十分なのですが、私は欲が出てきました」

と言い、

「頂戴したいものが一つ有ります。貴方にしか出来ない事です」

と、ヘラの目を見た。

「そうか、欲が出たか……。お前から、そんな言葉を聞くとは……。金か？」

「いいえ」

「では、女かな？」

「はい」

シャーマンの答えを聞き、キューピット人形から、「え～!？」という声が出た。

「ふふ、あの人形は面白い……」

ヘラは目を細め、キューピット人形を見たが、すぐにシャーマンに向き直り、

「わたしが提供できる女と言うと、侍女の中の誰かになるが、う～ん、誰かな～?……」

と唸りながら、腕組みをした。

「いいえ、侍女の方では有りません。……私が欲しいのは……」

シャーマンが答えを言おうとするのを、

「待て待て、ちょっと待ってくれ」

ヘラは慌てて、止めた。

隣に立っている従者の顔を見て、ヘラは目で何かを尋ねる。

従者は、「いまさら、あと一人ぐらい、どうってこと無いですよ」と答える。

ヘラは、「口で言うな、口で」と、しばらく従者を睨んでいたが、やがて、シャーマンの顔を見て、

「では、誰が欲しいのですか？ あなたの口から言って下さい」

と優しく微笑んだ。

シャーマンはキューピット人形の前に立ち、

「まずは、これを見て下さい」

人形の殻を取りながら、

「お願いします、話だけは聞いて下さい」

とヘラに訴えた。

キューピット人形の殻が剥け、中からキューピットが現れた。

ヘラは、「やはり、中に人が入ってたか。やはりな」とうなづき、

従者は、「はあ～、ご苦労なことで……」と感心している。

「彼は、キューピットと云い、愛のメッセンジャーをしています」

シャーマンが紹介すると、泣きべそをかきながらキューピットが頭を下げた。

「身体に沢山のタンコブが出来てるね。どうしたの？」

ヘラが尋ねると、

「中で、ガンガンと……痛かったよお～……」

キューピットが涙を零しながら答えた。

「可哀相に……」

ヘラは従者に、薬を持って来るよう言ったが、従者はキューピットをじっと見ながら、

「白い肌、くるくる頭の金髪、ぽっちゃり……う～ん……」

と唸っている。

シャーマンは、頃合だと感じ、

「私に免じて、この子を許してやって下さい。……この子が、人形劇の張本人です」

と頭を下げた。

「う～む……」

目つきが厳しくなるヘラ。

「ヘラ様、この子を許してやって下さい。この子は私にとって、大切な子なのです」

シャーマンは土下座をして訴える。

キューピットも横に並んで土下座をしている。

ヘラはキューピットを睨みながら、

「どうして、わたしを馬鹿にする劇を演じたのだ？」

と尋ねた。

「はい、ヘラ様。僕は有名な方をあまり知りません。ヘラ様と、ゼウス様と、ヴィーナス様と……あまり知らないのですが、その中で一番注目されているのがヘラ様だと思いました。……それで、ヘラ様の劇をしたいと思ったのですが……ストーリーが浮かばなくて、めちゃくちゃにしゃべっていたら、めちゃくちゃな話になってしまって……」

「分かった」

ヘラは、追い払うように手を振ってから、次にシャーマンに向かって、

「この子はお前の何なんだ？」

と尋ねた。

「はい。この子は……、わたしの友人であり、大切な女性の友人でもあります」

「ほお……この子が友人かぁ……」

「はい、唯一の友人です」

「……寂しいな……」

ヘラは、そうつぶやきながら目を伏せた。そして、

「良いぞ、この子は許してやる……」

と言った。

「ありがとうございます」

「まさか、子供を打つ訳にもいかないし、それに、人を打つのは、もうやめた」

ヘラの言葉に従者は目を輝かせている。

「それで、本題だ。……どの女が欲しいのだ？ 言ってくれ」

目を上げて、ヘラはにっこり微笑む。

「いえ、この子を許して頂ければ、それで十分です」

「え～。もしかして、この子は女の子か？」

「いえ、男の子です」

「分からん！ お前は、女が欲しいと言ったじゃないか！」

「この子が、私と恋人との橋渡しをしてくれているのです。この子が居ないと、私と恋人とは繋がらないのです」

「ふ～ん、そうか」

面倒臭そうに了解したヘラは、

「最後に聞くけど、欲が出てきた、って言ってたが、あれはどういう意味だろう？」

と尋ねた。

「私は今まで、友人も、恋人も、自分自身にも興味が薄かったのですが、この屋敷に来てから執着が出てきました。この子、いや、友人を助けていただいて、この友人と一緒に、もっと欲しいものを探して、得るように生きたいと考えたのです」

シャーマンの言葉を聞き、ヘラは従者に、

『今の言葉、書き留めておけよ。後でゆっくり検討するから』

と、小さな声で指示をした。

「後であの人にもう一度言ってもらいますが……、あの人、もう一度言えるかな～？ もの凄く複雑で、わたしなんか全然理解できなかった。……言えるかな～！」

と言う従者の頭を、ゴチン！

「お前は～！。なんで大きな声を出す！ お前の地声は大きいんだ、ささやけ！」

ヘラは睨みつけた。

……

シャーマンとキューピットが帰ろうとした時、

「なあ、シャーマン。……ゼウス軍に入らないか？」

ヘラが尋ねた。

「え！？ ゼウス軍に？」

「ああ。……我慢強いし、口は堅い、仲間を大切にする、おまけに、人形の声色を出して敵を動揺させる技がある」

「あ！？ 分かってましたか」

「そりゃあ、何日も人形の声聞いていたら、誰だってお前がしゃべっていることに気付くさ」

ヘラは、「ふふふ」と楽しそうに笑った。

「シャーマンさん！ 入りなよ。すごいチャンスだよ。うまくいけば将軍になれるよ！」

キューピットも勧めた。

「そうだな。欲が出てきたって事だし、ここは一丁、大欲かくか！」

シャーマンは威勢良く快諾した。

「良かった～。……これで、少しは罪滅ぼしが出来た気がする……」

ヘラは目を赤くした。

キューピットは、今日も走る。

彼の愛馬は、速い、速い。

ゼウスの町のはるか南のスパルタの町のさらに南にある『ガラマイ』という小さな村から、エジプトの南方にあるゼウス軍の前線キャンプまで、キューピットは、馬を走らせ一週間で移動した。

「シャ～マ～ン！ おまたせ！」

キューピットは伝言を届けにきた。

「ありがとう、道中、大変だったろう」

シャーマンのねぎらいに、

「何の問題も無いよ。馬は速いし、……ほら、これ！」

キューピットは懐から面を取り出し、被ってみせた。

「うわ～……」

まがまがしい面に顔をしかめるシャーマン。

「これを被りながら、この武器を持って、恐ろしい呪文の言葉を唱えながら走っていると、悪党も野獣も、みんな恐れて近寄らないよ」

キューピットは、柄の長いカマを手にとって構えた。

気味の悪い面、柄の長いカマ、鳥の羽のように裾に切れ目が入った黒いマント、これを装備して早い馬で走れば、空飛ぶ恐ろしい怪物が、地表すれすれを飛んでいるように見える。おまけに呪文も効果的。言葉が通じなくとも、おどろおどろしく唱えれば雰囲気は伝わる。キューピットの得意分野だ。

「これは、誰も近づかないな」

「そう！、キューピットファッション、って言うんだ」

得意げなキューピットに、

「これに自分の名前を付けない方がいいぜ。後々後悔すると思うよ」

シャーマンは忠告した。

「そうかなあ……じゃあ、名前は考えとくよ」

「ところで、あれからヘラの屋敷の様子は、どうだ？」

「うん、ヘラ様はだんだんと、昔のヘラ様に戻って行ってる。……時々、叩きたくなったら、キューピット人形を叩くそうだよ」

「声が出ないだろ。満足してるのか？」

「従者の人達が横に座って、きゃ～、きゃ～言ってる」

「そうか！、良かったな。……ところで……あの人形の名前は、『キューピット』のままなのか？」

「うん！、なんせ、大枚叩いて作ってもらった大切な人形だからね」

「お前な～、ちょっとおかしいぜ。いいか、叩かれ人形なんだぞ、叩かれ人形！。そんな物に、自分の名前を付けるか？……お前～……これから先～……名乗ったとたんに叩かれるようにな

るぜ」

シャーマンはニヤリと嫌な顔をした。

「へへへ……新しい名前、考えとく……」

「いいか、絶対に『シャーマン』人形にするなよ」

「うん、分かった」

「俺はもう、御免だからな……」

シャーマンは痛そうな顔をした。

「ねえ？ ソニヤさんからのメッセージ、聞く？」

キューピットが馬から降りた。

シャーマンは、「う～ん……」、少し考えてから、

「後にしよう。……今日はここに泊まっていくんだろ？」

と、いつもの確認をした。

「うん！、泊まる。でも、シャーマンの返信を、急いで伝えたいから、明日、出発するよ」

キューピットも、いつもの返事をした。

「だったらメッセージは、夜、酒を飲みながらじっくりと聞きたい。……と決まったところで、夕飯だ。一緒に食おうぜ」

「へへへ」

……

キューピットは、今でもシャーマンとソニヤの愛のメッセンジャーを務めている。

二人の愛は激しく燃え上がり、遠征から帰ったら、二人は結婚する予定になっている。

新居は、ゼウスの町。

キューピットも、二人とずっと一緒に居れるから楽しみにしている。

え！？、ソニヤは架空の人間なんだろ、って？

う～ん……違うんだよな。

実は、キューピットはいろいろと町や村を駆け回り、シャーマンと相思相愛になれそうな『ソニヤ』という名前の女性を探しまくった。

そして、『ガラマイ』という村で理想の女性を見つけた。

と言う事で、キューピットは、何とかつじつまを合わせた。

……キューピットも、よくやるわ……

(第二話、愛のメッセンジャー・キューピット、完)